研究論文

ソチオリンピックの選手談話における日韓比較

Contrastive Discourse Analysis of Japanese and Korean Athletes at Sochi Olympics

山根（吉長）智恵・朴珍希
Chie Yamane-Yoshinaga, Jinny Park-Craig
山陽学園大学・岡山後楽館高等学校
Sanyo Gakuen University, Okayama Korakukan High School

キーワード：対照談話分析、肯定的な談話、配慮表現、フィラー
Keyword: contrastive discourse analysis, affirmative discourse, considered expressions, fillers

要旨

本稿は、冬季オリンピックを言語分析の場として取り上げ、日本と韓国のテレビ放送に見られる選手の談話において、①談話の内容面、②発話の言語形式面から対照分析を行った。

その結果は以下の３点にまとめられる。

（１）内容面については、日本選手・韓国選手共、国名や国旗という語彙を用いて述べたり、緊張・プレッシャーのような否定的な語彙を使用して語ったりする例より、メダル獲得やオリンピック参加という個人の目標達成に言及する例が見られた。また、選手個人に影響を及ぼした東日本大震災・国籍変更のような出来事を語る例も見られた。ここから、内容面については、ことさら国家を表出するのではなく、選手を取り巻く特殊状況を組み入れつつも、選手個人の結果を肯定的に捉える談話が多用されることが明らかになった。

（２）言語形式面については、日本選手においては①「ま（ー)」「も（ー)」のような和らげや心情を示すフィラーを使用する、②「な」「思う」「いうふうに」などを発話の末尾に重ねて使用することで、韓国選手においては①「것 같다（思う)」「한 것 같다（～たと思う)」、「나（わたし)」「저（わたくし)」、「니다（ニダ)」「요（ヨ)」を使い分けることで、

聞き手への配慮を示す傾向があることが明らかになった。
（３）韓国は「上昇志向が強い」社会であるが、本稿の分析では、先行研究と比較し、上昇志向の少なさが窺えた。

Abstract

The aim of this study is to analyze spoken discourse between Japanese and Korean athletes of Sochi Olympics and to pursue the similarity and the differences between them. The results of this study are as follows:

1. Contents

Both athletes expressed their joy to get medals or participate in Olympics rather than express their tension or pressures. On the contrary, there were a small number of athletes who talked about their nation. In addition, some athletes talked about the Great East Japan earthquake or the change of nationality. From these discourses athletes expressed more emphasis on their individual results and circumstances rather than nations.

2. Language usage

Japanese often used “I think~”, “I feel like~”, sentence ending particles like “na”, “kana” and fillers, especially “mo(o)” and “ma(a)” to express their mentality or to convey their opinions gently. On the contrary, Koreans used “I thought~”, honorific and humble words.

3. Few Korean athletes did not mention about gold medal. It reflected the decrease of upward mobility.

１．はじめに

4 年ごとに開催されるスポーツの祭典オリンピック。スポーツ選手にとっては憧れの場・目標の場であり、普段スポーツに興味のない人々をも魅了するオリンピックであるが、対照言語学の観点からオリンピックという場面が取り上げられることはなかった。それはメイナード（1993）[1]や亀井他（1996）[2]にまとめられているように、文の規則のような、言語の構造を対照とするものが対照言語学研究であったからである。ところが、メイナード（1993、1997）にも述べられているように、特に 1980 年代以降、文を超えた談話研究が盛んになる[3]。それは、異なる国家・社会・文化に属する人々がコミュニケーションを行う際、2 言語以上の談話を分析し、その類似点・相違点を理解しておくことが、より円滑なコミュニケーションにつながることを、我々が認識し始めたからであろう。

このような中、山根・朴（2011）は、国家を担って参加するという意識が見られるオリンピックという場に着目し、日本と韓国の社会・文化の相違が新聞のオリンピック記事に見られるのかを、1952 年のヘルシンキから 2008 年の北京までの大会の見出しに頻出する語彙を分析することで言及した[4]。次いで山根・朴（2015）では、ロンドンオリンピックについても考察を重ね、語彙分析のみならず、新聞の見出し全体が肯定的な内容かそうでないか、選手のインタビュー記事の内容にどのような特徴が見られるかについても分析した。また山根（2011）では、国技に出場したオーストラリア・中国・韓国・日本選手のインタビュー

談話を新聞・雑誌・インターネットから収集し、談話に表出される国家意識や各国の社会的・文化的背景との関連を探り、さらに Yamane ・ Park ・ Kimura（2015）では、新聞記事だけでなく、テレビ放送の選手のインタビュー談話も含め、日本・韓国・中国で対照分析を行った。

本稿は、これら一連の研究をもとに、Yamane ・ Park ・ Kimura（2015）で初めて触れた冬季オリンピックに焦点を当て、日本と韓国のテレビ放送における選手の談話[5)]の対照分析を試みる。注目度が高いオリンピックの放送においてマイクを前に発言する場合、他の大会とは比べものにならないほどのプレッシャーが働き、それが意識的あるいは無意識的に言語使用に影響を及ぼす可能性がある。であるとすれば、それはどのような言語表現なのだろうか。本稿では、①談話の内容にどのような特徴があるか、②談話中の言語形式にどのような特徴があるか、③国・言語が異なると、内容面・言語形式面に相違が見られるのか、それは各国の社会・文化と関係しているのか、の 3 点に絞り、分析・考察を行っていく。

２．データについて

データの出典については２．１．で、発話・談話の認定方法については２．２．で、日本、韓国の順にまとめる。

２．１．データ

ソチオリンピックは、2014 年 2 月 7 日の開会式に始まり、2 月 23 日の閉会式で終わっている。そのうち日本・韓国共にテレビ局各 1 社を選び、データを収集した。

２．１．１．日本

全国放送かつ公共放送である NHK（日本放送協会）の午後 7 時のニュースに出現する談話を対象とした。収集期間は 2 月 7 日から 2 月 24 日まで、分析対象は 28 選手の 110 談話（157 発話）である[6)]。

２．１．２．韓国

全国放送かつ公共放送である KBS（韓国放送協会）の「KBS ニュース広場」中の談話を対象とした。収集期間は 2 月 8 日から 2 月 24 日まで、分析対象は 16 選手の 65 談話（92 発話）である[7)]。

２．２．発話・談話の認定方法

1 発話、1 談話の認定については、以下の通りとした。

２．２．１．日本

「です」「ます」で終わる発話以外は、そこで一定のポーズ（間）が確認できる場合は 1 発話とした。また、話の途中で別の映像に切り替わり、解説が入った場合は、映像に切り替わる前までを 1 談話とした。

例　1 談話 2 発話（2 月 9 日　上村）

①スタートの時にいつもほんとに震えてたんですよ　毎回

②今日はもう　前にしか向いてなくて（映像）

２．２．２．韓国

日本同様、「요（ヨ）」「니다（ニダ）」[8]で終わる発話以外は、そこで一定のポーズ（間）が確認できる場合は 1 発話とした。また、話の途中で映像に切り替わり、解説が入った場合は、映像に切り替わる前までを 1 談話とした。

例　1 談話 1 発話（2 月 19 日　パク・スンヒ）

4 년 전에 뺏겼던 금메달을 다시 저는 인제 가져온 기분이라서（映像）

（4 年前に奪われた金メダルを私は今取り戻したような気分なので）

３．結果

３．１．では内容面について、３．２．では言語形式面について分析した結果をまとめる。

３．１．内容面について（表 1～表 2 参照）

オリンピックはもともと「より速く、より高く、より強く」というスポーツの神髄を目指すものであったが、近年は国家を背負い、メダル獲得を競う傾向が強い[9]。ゆえに、インタビューや記者会見に臨む選手は、そのオリンピックでメダルを獲得した選手やメダルを期待されている選手が多い。そこで本稿では選手の談話を、①「肯定的」（「最高」「満足」「幸せ」など肯定的な言語表現が含まれるもの。談話全体がプラス思考のもの）、②「否定的（「緊張」「滑りづらい」「いい結果を出せなかった」などの否定的な言語表現が含まれるもの。談話全体がマイナス思考のもの）、③「否定的→肯定的」（否定的な言語表現が最初に出現するが、談話の最後は肯定的な言語表現で終わるもの）、④「肯定的→否定的」（肯定的な言語表現が最初に出現するが、談話の最後は否定的な言語表現で終わるもの）、⑤その他（肯定的、否定的な意味合いを持たないもの）に分け、選手ごとに表にまとめた。これは、山根・朴（2011）において、見出し語に肯定的な意味を持つ語が出現しても、見出し全体としては否定的な意味になっているものがあり、また山根（2011）では、メダルを獲得しても金メダルでない場合、喜びを表すインタビュー記事ではないものが見られたため、選手が談話内でどのように心情を表出しているのか、その傾向について分析しようと考えたからである。

日本の場合、インタビューでは「肯定的」72 談話（59.0%）、「否定的」4 談話（2.6%）、「否定的→肯定的」25 談話（25.6%）、「その他」9 談話（12.8%）で、「肯定的→否定的」談話は見られない。「否定的→肯定的」談話については、最後に聞き手に残るのが「肯定的」な発話だということを考えると、実に 84.6%の 97 談話が肯定的な談話となる。

一方韓国の場合、「否定的」談話が 1 談話（1.5%）、「肯定的→否定的」談話が 2 談話見られるものの、日本と同様最も多いのは「肯定的」談話で、37 談話（56.9%）を占めた。次に多いのも「否定的→肯定的」談話で 16 談話（24.6%）であった。そしてこの合計が 53 談

話となり、やはり 8 割を超えた（81.5%）。

上記①～⑤の各種類の度数について、国（2 水準：日本・韓国）×種類（5 水準：①～⑤）の$\chi 2$ 検定を行ったところ、$\chi 2$（4）＝5.828 で有意な偏りは見られず、ここから合計談話数の多少に関わらず、日本・韓国の談話の傾向が類似していることも明らかとなった。

また、表 1 のうち、メダリストは羽生選手から小野塚選手まで上から 10 名、表 2 のうちイ・サンファ選手からイ・スンフン選手まで 5 名で、それ以外はメダルを逃した選手だが、メダルを獲得した、していないに関わらず、日本・韓国の両選手共、肯定的な談話で希望、勝利の喜び、オリンピックの楽しさを表現していることが窺えた。

①「肯定的」な談話例

例 1　これからも私のスケートを信じて成長していけたらいいなと思いますし、自分にとってこの 2 回のオリンピックは最高のオリンピックでした（2 月 23 日　浅田）

例 2　언제 이 날이 올까 기다렸는데 드디어 소치에 오게 되었는데요.（いつこの日が来るのか楽しみにしていて、やっとソチに来ることができたんですね）（2 月 12 日　キム・ヨナ）

②「否定的」な談話例

例 3　思ったほどエリック選手は離れてくれなくて　ま　そこで朴の体力は尽きたという感じで　まあ　もう　そこで勝負は終わってました（2 月 13 日　渡部あ）

例 4　저는 아직까지도 제 컴플렉스가 허벅지예요 .（(質問：自分の太ももについて）いまだに私のコンプレックスは太ももです）（2 月 14 日　イ・サンファ）

③「否定的→肯定的」な談話例

例 5　何回もオリンピックに出て　えー　何回も挫折しそうにはなりましたけど　努力はそれだけじゃないっていうことを　絶対続けて頑張れば自分の夢は叶うっていうことが証明されたんじゃないかなと思います（2 月 16 日　葛西）

例 6　긴장해서 점프를 제대로 뛰지 못 하고 프로그램 직전까지도 점프에 대한 자신감이 하나도 없었는데 뭐 뭐가 다르겠냐 그냥 믿고 하자 했더니 다행히 잘 다행히 잘 마무리를 진 것 같습니다.（緊張してジャンプがきちんと決めることができず、プログラムの直前までもジャンプに自信が全然なかったのですが、何、何も違わない、ただ自分を信

じよう、と思っていたら、幸い、幸いなことに良い仕上がりになったと思います）（2 月 20 日　キム・ヨナ）

④「肯定的→否定的」な談話例

例 7　가장 기쁜 건 아직까지 제가 이 자리에 서 있을 수 있다는 거 그리고 좀 슬픈 건 이제는 뭐 스케이트를 못 탄다는 거 선수로서（最も嬉しいことは、まだ私はこの場に立つことができるということ、そして少し悲しいことは、これからはスケートができないということ、選手として）（2 月 18 日　イ・ギュヒョク）

⑤その他

例 8　気分は　あ　試合だな　という感じ　します（2 月 9 日　大澤）

例 9　이제 큰 시합이다 보니까 제가 한 점프 한 점프 들어갈 때마다 생각이 많았던 것 같아요.（これは大きな競技だから、私はジャンプ一つ一つに入るたびに、いろいろなことを考えたような気がします）（2 月 21 日　パク・ソヨン）

表１　日本選手の談話内容

選手名	肯定的	否定的	否→肯	肯→否	その他	合計(談話数)
羽生	12	1	1		1	15
渡部あ	5	1	1		2	9
葛西	10	1	6		1	18
平野	4		1			5
竹内（ｽﾉﾎﾞｰ）	1		2			3
平岡	2					2
清水	2		1			3
伊東	3		1			4
竹内（ｼﾞｬﾝﾌﾟ）	4		2			6
小野塚	3					3
上村	3		2		1	6
高橋（ｽｹｰﾄ男）	1		2			3
竹内（ﾎｯｹｰ）	1					1
鈴木	1					1
大澤					1	1
浅田	8		1		3	12
高梨	3	1	1			5
長島	1					1
加藤（ｽｹｰﾄ）	1					1
高橋（ｽｹｰﾄ女）			1			1
渡部よ			1			1
小笠原	1		1			2
町田	1					1
田畑			1			1
押切	1					1
高木	1					1
村上	1					1
三星	2					2
合計（談話数）	72	4	25		9	110
合計（%）	59	2.6	25.6		12.8	100

注）国（2水準：日本・韓国）×種類（5水準：①～⑤　本文参照）のχ2検定では、
χ2（4）＝5.828で有意な偏りは見られなかった。

表２　韓国選手の談話内容

選手名	肯定的	否定的	否→肯	肯→否	その他	合計（談話数）
ｲ・ｻﾝﾌｧ	5	1	2	1	1	10
ｼﾑ・ｿｯｷ	3					3
ﾊﾟｸ・ｽﾝﾋ	5		1			6
ｷﾑ･ﾖﾅ	10		4		3	17
ｲ・ｽﾝﾌﾝ	1		2			3
ｲ・ｷﾞｭﾋｮｸ	1		1	1		3
ｷﾑ・ﾋｮﾝｷﾞ	2					2
ｷﾑ・ﾄﾞﾝﾋｮﾝ	1		1			2
ﾓ・ﾃﾎﾞﾑ			1			1
ﾁｪ・ｼﾞｪｳ	1					1
ﾊﾟｸ・ｽﾝｼﾞｪ					1	1
ﾕﾝ・ｿﾝﾋﾞﾝ			1			1
ｷﾑ・ｳﾝｼﾞ	1					1
ｷﾑ・ﾍｼﾞﾝ	1					1
ﾊﾟｸ・ｿﾖﾝ					1	1
ｱﾝ・ﾋｮﾝｽ	2				2	4
その他	4		3		1	8
合計（談話数）	37	1	16	2	9	65
合計（%）	56.9	1.5	24.6	3.1	13.9	100

注）国（2水準：日本・韓国）×種類（5水準：①～⑤　本文参照）のχ2検定では、
χ2（4）＝5.828で有意な偏りは見られなかった。

３．２．言語形式面について（表 3～表 6 参照）

言語形式については、両言語共に常体、敬体、終助詞（間投助詞を含む）があり、話し言葉に特徴的なフィラーも存在する。また、韓国語には敬体に「요（ヨ）体」と、より丁寧な「니다（ニダ）体」という 2 種類が存在する。本稿のデータにおいてもこれらの言語表現が多く見られたため、本項ではこれらを中心に分析した。特に発話の末尾については、単なる常体、敬体の違いだけでなく、特徴的な表現が見られたため、その表現を中心に表にまとめた。

まず日本の場合、最も特徴的な言語表現はフィラー[10]で、129 例出現する。発話数が少なく、かつ 1 発話が短い選手には基本的には出現しないが、28 選手中 17 選手が使用し、そのうち 4 選手は発話数よりフィラー数の方が多いことが表 3 から明らかである。フィラーのうち最も使用頻度が高いのは「マ（ー）」の 31 例で、10 選手が使用しており、例として「マやってみないとわからないんで　マ　どうなるのかっていうのは楽しみです」(2 月 8 日　渡部あ）が挙げられる。そして「アノ（ー）」28 例、11 選手、「モ（ー）」18 例、8 選手、「エー」17 例、6 選手、「ハイ」8 例、7 選手と続く。

次に顕著なのは、「思う」[11]の使用頻度の高さである。発話の末尾に出現する 59 例、途中に出現する 29 例を合わせると、1 発話の途中と末尾の両方に出現するような重複する例が

含まれるにしても、88 例（56.1%）と 5 割を超える。その他、終助詞「な」「かな」が使用される発話が合計で 51 例（32.5%）、「～たい」が使用される発話が 31 例（19.7%）出現する。さらにこれらについては、「レベルアップできるようにしたいなーと思います」（2 月 7 日　上村）、「久々に自分らしい滑りができたのかなと思って」（2 月 12 日　平野）、「もちろん金　モ　ゴールド　エー　取りたいと思います」（2 月 17 日　清水）、「すごく価値のあるメダルだったなーと思います」（2 月 21 日　小野塚）のように、「思う」「な」「かな」「～たい」が複数組み合わさって出現するものも多い。会話によく見られる「ね」については、「な」「かな」より少なく、また「うれしいという感じですね」（2 月 14 日　羽生）のように発話の末尾に出現するものが 13 例中 9 例とほとんどであった。

一方韓国の場合、フィラーについては、「같은 경기장에서 경기를 하니까 저도 그 기를 받아서 어 긍정적인 결과를 얻었으면 좋겠습니다.（同じ競技場で試合をするので、私もそのパワーをもらって　アノ　肯定的な結果が得られたらいいと思います。）」（2 月 19 日　キム・ヨナ）のような「어（アノ（ー））」[12] が 9 例見られるものの、フィラーの種類も出現数も少なく、発話数におけるフィラー数の割合は、日本が 82.2%、韓国 18.5%と大きな違いがある。人数についても日本は 28 選手中 17 選手（60.7%）が使用し、16 選手中 6 選手のみ（37.5%）という韓国を大きく上回る。また、韓国選手には、発話数を上回るフィラーを使用する選手も見当たらない。

次に「것 같다, 생각하다（思う）」[13] であるが、50 例見られ、日本同様非常に多く、54.3%と 5 割を超える。「둘 다 「징하다」 이런 생각하게 되는 것 같아요.（互いに「運命だ」このように考えると思います）」（2 月 8 日　キム・ヨナ）、「가장 중요한 게 그 첫 처음 스타트라고 생각해요.（最も重要なのはその最初、最初のスタートだと思います）」（2 月 8 日　イ・サンファ）のような例である。ただし、韓国語の場合「것 같다」「생각하다」「느낌이 들다」のような、「思う」と訳すことができる語がいくつかあり、その中で「것 같다」と過去形が組み合わさった「한 것 같다（～たと思う）」に、自分の気持ちをより客観的に示す意味合いが含まれる点が特徴的である。特に「언니 생각하면서 조금 더 열심히 했던 것 같아요 .（姉のことを思いながらもっと頑張ったと思います）」（2 月 14 日　パク・スンヒ）

のような「한 것 같다」の使用が 33 例あり、それは総出現数 50 例の 66%にあたり、7 割近くを占めている。また、終助詞・間投助詞の「요（ね）」は、21 例中 19 例が発話中に出現するもので、発話の末尾に多く出現する日本とは対照的である。さらに「고 싶다（たい）」も 2 例しか見られない。

上記以外では、敬語表現について 2 点挙げられる。1 点目は丁寧体使用で、韓国語では日本語の「です・ます」にあたる形式に「니다（ニダ）」「요（ヨ）」の 2 種類あるが、丁寧度がより高い「니다（ニダ）」より「요（ヨ）」のほうが使用度が高いという傾向が見られたことである。2 点目は「私」で、「わたくし」と訳される「저（チョ）」、「わたし」と訳される「나（ナ）」があるが、「わたくし」が 36 例見られるのに対し、「わたし」は 3 例のみであったということである。このように、敬語表現の使用についても、興味深い結果が得られた。

表３　日本選手の言語形式

選手名	思う	思う(途中)	です	ます	たい	な	かな	ね	ﾌｨﾗｰ	発話数
羽生	12	4	1	3	5	6	7	2	14	25
渡部あ	5		1	2	2	1	2	1	30	14
葛西	7	6	8	3	4	2	3	3	33	29
平野	1	1		1	3		1	2	4	7
竹内（ｽﾉﾎﾞｰ）	1	1	1		1	1			3	3
平岡			3						3	3
清水	2		2	1	1	1		1	9	6
伊東	1	1	3		1				5	5
竹内（ｼﾞｬﾝﾌﾟ）	3	1		2	1	5	1		5	8
小野塚	2	1				1			3	3
上村	3	1			1	4		3	4	7
高橋（ｽｹｰﾄ男）	3	1				2	1		3	3
竹内（ﾎｯｹｰ）	1				1	1				1
鈴木	1	1				2				1
大澤				1		1				1
浅田	7	7	2	2	3	3	2	1	5	15
高梨	3	3	2		3					8
長島	1		1						2	2
加藤（ｽｹｰﾄ）	1									1
高橋（ｽｹｰﾄ女）			1						1	1
渡部よ	1				1					1
小笠原	2				2	2			1	4
町田				2						2
田畑		1							4	1
押切	1						1			1
高木					1					1
村上	1					1				1
三星			1		1					3
合計	59	29	26	17	31	33	18	13	129	157

表４　韓国選手の言語形式

選手名	思う①	思う②	丁寧①	丁寧②	ね	わたくし	フィラー	発話数
ｲ・ｻﾝﾌｧ	6	5	13		6	6	2	15
ｼﾑ・ｿｯｷ	3	3	4		2	3	1	5
ﾊﾟｸ・ｽﾝﾋ	3	2	4		3	5	2	9
ｷﾑ･ﾖﾅ	17	12	10	9	5	10	8	22
ｲ・ｽﾝﾌﾝ	4	3	3	1		1		5
ｲ・ｷﾞｭﾋｮｸ	2		2			3	1	3
ｷﾑ・ﾋｮﾝｷﾞ	1			1				2
ｷﾑ・ﾄﾞﾝﾋｮﾝ	1	1	1	2	1			3
ﾓ・ﾃﾎﾞﾑ								1
ﾁｪ・ｼﾞｪｳ			1		1			2
ﾊﾟｸ・ｽﾝｼﾞｪ			1					1
ﾕﾝ・ｿﾝﾋﾞﾝ	1			1				2
ｷﾑ・ｳﾝｼﾞ	2	1	1	1	1	1		2
ｷﾑ・ﾍｼﾞﾝ								1
ﾊﾟｸ・ｿﾖﾝ	1	1	1			1		1
ｱﾝ・ﾋｮﾝｽ	2	1	2	3		4		6
その他	7	4	7	2	2	2	3	12
合計	50	33	50	20	21	36	18	92

注）「思う①」は発話末が「思う」で終わるものすべてを、「思う②」は発話末が「たと思う」になるものを、「丁寧①」は発話末が「ㅛ」で終わるもの、「丁寧②」は発話末が「ㅂ다」で終わるものを、「ね」は「ㅛ」を意味する。

表５　日本選手のフィラーの種類と出現数

選手名	ﾊｲ	ｱｰ	ｲｰ	ｴｰ	ｵｰ	ﾅﾝﾃﾞｽｶﾈ	ｱﾉ(ｰ)	ｿﾉ(ｰ)	ﾏ(ｰ)	ﾓ(ｰ)	ｲﾔ(ｰ)	ﾅﾝｶ	ｺｰ	ｴｯﾄｰ	ｿｳﾃﾞｽﾈ	合計	発話数
羽生						1	6	1	2	4						14	25
渡部あ				3			7	2	15	1			1	1		30	14
葛西	1	2	2	4	3		1		6	7	3	2	2			33	29
平野									2						2	4	7
竹内(ｽﾉﾎﾞｰ)	1						1		1							3	3
平岡										1	1	1				3	3
清水	1			6					1	1						9	6
伊東	2	1		2												5	5
竹内(ｼﾞｬﾝﾌﾟ)				1			3							1		5	8
小野塚									1	2						3	3
上村	1						1		1	1						4	7
高橋(ｽｹ男)							3									3	3
竹内(ﾎｯｹｰ)																	1
鈴木																	1
大澤																	1
浅田							3		1	1						5	15
高梨																	8
長島	1								1							2	2
加藤(ｽｹｰﾄ)																	1
高橋(ｽｹ女)							1									1	1
渡部よ																	1
小笠原							1									1	4
町田																	2
田畑	1			1			1						1			4	1
押切																	1
高木																	1
村上																	1
三星																	3
合計	8	3	2	17	3	1	28	3	31	18	4	3	4	2	2	129	157

表６　韓国選手のフィラーの種類と出現数

選手名	ｱ（ｰ）	ｱﾉ（ｰ）	ｴｴ	ﾊｲ	ﾅﾝｶ	合計	発話数
ｲ・ｻﾝﾌｧ		2				2	15
ｼﾑ・ｿｯｷ		1				1	5
ﾊﾟｸ・ｽﾝﾋ				2		2	9
ｷﾑ･ﾖﾅ	3	4			1	8	22
ｲ・ｽﾝﾌﾝ							5
ｲ・ｷﾞｭﾋｮｸ		1				1	3
ｷﾑ・ﾋｮﾝｷﾞ							2
ｷﾑ・ﾄﾞﾝﾋｮﾝ							3
ﾓ・ﾃﾎﾞﾑ							1
ﾁｪ・ｼﾞｪｳ							2
ﾊﾟｸ・ｽﾝｼﾞｪ							1
ﾕﾝ・ｿﾝﾋﾞﾝ							2
ｷﾑ・ｳﾝｼﾞ							2
ｷﾑ・ﾍｼﾞﾝ							1
ﾊﾟｸ・ｿﾖﾝ							1
ｱﾝ・ﾋｮﾝｽ							6
その他		1	1	1		3	12
合計	3	9	1	3	1	17	92

４．考察

本章では、前章の分析結果を先行研究の結果と比較しつつ、考察していく。

まず、内容についてだが、山根（2011）で国技に出場した選手の談話（新聞・雑誌・インターネット）を分析した際、特徴的だったのは、オーストラリア・韓国・中国・日本共に「プレッシャー表出」であった。これは、国技の場合、特に国民からの期待が大きいためであると言える。特に日本選手の場合、たとえメダルを取っても「あれが自分の実力です（塚田）」「金メダル以外は同じ（中村）」（p.103）のように、否定的な内容も見受けられた。また、山根・朴（2011）の新聞の見出し分析では、日本・韓国共に国名が最も多く出現した。さらにチョ（2006）でも「韓国人は人一倍上昇志向の強い民族です。今の生活にあまり満足せず、上を目指して頑張っていきます」と述べられているように、上昇志向の強い韓国では、「銀」「銅」と比べ、「金」が圧倒的に多いという結果となった。ロンドンでは山根・朴（2015）で述べたように、韓国では国名が激減したが、それでも日本・韓国共に見出しには国名の使用頻度が最も高く、韓国での勝利至上主義（勝者に焦点が充てられる）に変わりはなかった。

ところが、本稿の分析データでは、日本で国名が 6 例（日本の皆さん、日本一幸せ、日本男子、日本女子、日本の国旗、日本の人たち）見られたものの、韓国では皆無であった。国に関連する語彙についても、日本では「国民」2 例、「国旗」1 例のみ、韓国でも「国民」1 例、「愛国者」1 例、「国家」1 例、「太極旗」2 例のみであった。また、プレッシャー表出の談話も、前章で否定的な談話が少なかったように、両国共ほとんど見られず、「金メダル」については韓国 1 例、日本 6 例と日本のほうが上回った。

このように、国意識やプレッシャー表出、韓国の一種の文化（気質）である上昇志向を表す「金」のような語彙が多用されないのに対し、目立ったのは個人の目標や結果に対する発言である。たとえば「銀メダルでしたけど　アノ　僕はすごく満足しています」(2 月 13 日　渡部暁)、「こういう舞台に一緒に来れて今はよかったなと思います」(2 月 18 日　村上)、「메달 딴 것 자체가 너무 어떻게 보면 감사한 것 같기도 하구요.（メダルを取ったこと自体は、考えて見ればとてもありがたいことだったと思いますし)」(2 月 22 日　シム・ソッキ）のように、メダル獲得やオリンピック参加という個人の目標達成に対する喜びを語っている。つまり、日本・韓国共、国家代表という意識や、緊張・プレッシャーという否定的な面をことさら強調するのではなく、個人の出来事として肯定的に捉えて発言するという特徴が見られるのである。

また、山根・朴（2015）は、ロンドンオリンピックの見出しの中に、オリンピックの前年に起こった東日本大震災の被災地の人たちを勇気づけようと立ち上がるアスリートの姿や、国籍を変更して日本にメダルをもたらした早川漣が取り上げられていることを指摘しているが、ソチオリンピックの談話の中にも「震災や復興のためにできることがあるんじゃないかと」(2 月 24 日　羽生)、「좋아하는 쇼트트랙을 할 수 있는 환경이 필요했습니다.（好きなショートトラックができる環境が必要でした)」(2 月 16 日　アン・ヒョンス）のように、震災に関する発話や、韓国からロシアに国籍変更してメダルを獲得した選手の例が見られる。これらは一見国家と関わっているとも捉えられるが、羽生選手の場合東北出身であること、アン・ヒョンス選手の場合自身の練習環境などを考慮しての国籍変更であったことを考えると、それらの発話は、やはり選手を取り巻く特殊状況を語っていると考えられる。つまり、国意識より個人の意識のほうが談話内容により影響を及ぼしているのである。

次に言語形式面を見ていくと、まず日本語では前章の分析で、テレビ放送の談話にフィラーの多さが見て取れた。山根（2002）では、一方向型の談話の場合、講演では「アノ（ー)」が、留守番電話では「エ（ー)」の頻度が最も高い。しかしソチでは「マ（ー)」が 31 例と最も多く、続いて「アノ（ー)」で、「モ（ー)」も「エ（ー)」とほぼ同じ数だけ出現している。山根（2002）は、「マ（ー)」に発話を和らげる、「モ（ー)」に心情の高まりを示す役割があることを指摘しているが、こういった役割があるため、オリンピックという場の談話においてはこれらのフィラー数が多いのではないかと思われる。これに対し、韓国の場合、和らげや心情の高まりに使用される「マ（ー)」「モ（ー)」のようなフィラー例がなく、フィラーの代わりに同じ語句を繰り返す発話も見られた。このような言語形式の機能の違いが、フィラー数に影響を及ぼしていると言える。

また、発話の和らげや心情と関連する表現は、日本語では発話の末尾にも顕著である。森山（1992）は「思う」には「個人的な意見、主張であることを断り、さらに、そうすることによって、主張を和らげるとでもいった機能を有している」と述べ、宮崎（2002）は「な」の付加によって、情意の発生の自覚という認識的意味がより顕著になる例があるこ

とを指摘しているが、「思う」「な」と「いうふうに」のような表現が合わさった、「自分の精一杯の演技ができたかなというふうに思います」（2 月 7 日　羽生）、「しっかりとアクセルを決めれたらいいなというふうに思っています」（2 月 21 日　浅田）のような発話も見られる。「～たい」という欲求の表現についても、テレビを見ている面識のない一般の視聴者に向け「～たいです」と言い切るのではなく、「あした最後の練習になると思いますけど　そこでしっかり合わせたいと思います」（2 月 10 日　高梨）のように「思う」を付加することで、欲求を緩和した表現となっている。自分の発言に対して一種の謙虚さを示すことで、好感を持って聞いてもらえるのではないか、という気持ちが、発話の末尾の言語形式に意識的に、あるいは無意識的に表れているのではないかと推察される[14]。

ところが韓国語の場合、「것 같다（思う）」だけでは和らげにはならない。「한 것 같다（～たと思う）」という、自分のことなのに第 3 者がコメントしたような言い方、言い換えれば結果に対して外部から観察したような言い方で和らげにつなげていき、日本語のように終助詞や「～ふうに」のような語句を付加して和らげにつなげていくことはしない。つまり、「思う」という動詞を基本とし、そこに客観性を持たせることで配慮を示していくのである。さらに、儒教の精神が未だ浸透し、目上への尊敬を示す表現が多い韓国では、聞き手への配慮として、「저（わたくし）」を使用することで自身を低める傾向があり、またより改まった表現の「니다（ニダ）」を使用せず、発話の末尾に「요（ヨ）」を使うことで聞き手との心的距離を縮めるなど、韓国語特有の配慮が見られる。

以上をまとめると、内容面については日本と韓国は類似しているが、特に韓国にこれまでの新聞記事の分析には見られなかった上昇志向の少なさが窺えた。また言語形式面については、フィラーや終助詞・「～たい」・「思う」を重ねることで聞き手への配慮を示す日本に対し、韓国では「것 같다（思う）」「한 것 같다（～たと思う）」、「나（わたし）」「저（わたくし）」、「니다（ニダ）」「요（ヨ）」を使い分けることで聞き手への配慮を示すという相違が明らかになった。

５．まとめと今後の課題

本稿では、ソチオリンピックに出場した日本・韓国両選手の談話を、内容面と言語形式面から見てきた。その結果、オリンピック出場を一選手として喜び、結果を肯定的に捉える内容と、それを聞き手に配慮して各国特有の文化を含む言語形式で印象づけることが指摘できた。特に内容面においては、国家を背負って戦うという意識より、一選手としてどう競技に向き合ってきたか、という意識のほうが強く表出しているように思われた。それが、国技が含まれない冬季オリンピックだからなのか、それとも国家から個人へという意識の流れなのかは、今後もオリンピックの談話を研究していくことで解明していきたい。

注

1）メイナード（1993）pp. 11-17 参照。

2）亀井他（1996）pp. 877-878 参照。

3）メイナード（1997）は、「我々は個人ひとりひとりがユニークな表現を創造しているにしても、それは社会に支えられた社会的言語を使うことによって可能になっている。よって、個人が言えることも社会的言語を媒介とするのであって、その表現はあくまで社会的言語を通して形成されるという事実を否定することはできない。その意味ではある言語表現傾向や思考傾向が認められ、それらがある社会、ある社会的コンテキストで比較的使い易く、また実際よく使われ強化されていくのである。そしてそこに言語間の差があるという事実は認めなければなるまい。このような観点から談話のレベルで言語間の比較を試みるのが、対照談話分析といわれる分野である（pp. 73-74）」と述べている。

4）対照研究ではないが、国家意識の変容を見るのにオリンピックに着目し、オリンピック関連記事を分析した研究に永吉（2006）がある。

5）本稿の談話には、競技後のインタビューだけでなく、放送された選手の談話を幅広く分析するため、帰国後、日本で行われた記者会見の応答も含めた。「談話」の定義は山根（2002）の「話し言葉における 1 文（1 発話）以上のまとまりのある内容をもった言語表現」とする。なお、選手名については、韓国の場合、同姓が多いため、韓国選手のみ氏名を明記している。

6）午後 7 時のニュースとしたのは、30 分という放送時間の中で、オリンピックのハイライト部分を的確に編集し、放送していると筆者の山根が判断したからである。また、談話数については、最終日などにそれまでの印象的な談話を再度放送している場合、その談話を含めて数えた。

7）KBS ニュース広場は、月曜日から水曜日までは午前 7 時から、木曜日から土曜日までは午前 6 時から 1 時間の放送で、日曜日は放送されない。本稿では、筆者の朴が録画不可能で、知人に依頼した関係で、朝のニュース広場（ワールドバージョン）を主に収集し、それが録画できない場合は午後 9 時のニュース 9（ワールドバージョン）を録画した。また、数名の選手については映像がなく音声のみ出ているので選手の氏名が不明なため、実際の選手数は 16 名より若干多い。なお、アン・ヒョンス選手については、国籍をロシアに変更したが、本稿の分析対象に含めている。

8)「요（ヨ)」「니다（ニダ)」は、日本語ではいずれも「です・ます」にあたり丁寧な形式だが、「니다（ニダ)」のほうが改まった印象を与えるため、初対面で目上の人に会った場合やアナウンサーがニュースを読む場合などでは「니다（ニダ)」が使用される。

9）神田・山根・高木（2011)、山根・朴（2015）参照。

10）フィラーの定義は山根（2002）の「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と協議の応答関係・接続関係を持たない、発話の一部分を埋める音声現象」とする。また、本稿では、日本語のフィラーはすべてカタカナで表記する。

11）表 3 の「思う」には、常体、敬体のいずれもが含まれる。また、「思って（い）ます」や「思う」の活用形（例 :「思って」）も含む。「です」「ます」には、「思っています」「～ですね」「～たいです」のように、「思う」「～たい」「ね」と合わせて使われるものは含めない。

12）表 6 の「ア（ー)」は「아」、「アノ（ー)」は「어」、「エエ」は「에」、「ハイ」は「네」、「ナンカ」は「뭐」の訳である。

13）表 4 の「思う①」には、「気がする」「のようだ」「考える」「感じがする」とも訳される「것 같다」「한 것 같다」「느낌이 들다」「생각하다」すべてを含め、「思う②」には「한 것 같다」のみをカウントしている。

14）発話を和らげる効果のある言語表現を、近年では「配慮表現」「緩和表現」と呼ぶことが多い。ポン（2004）、山岡他（2010）、野田他（2014）参照。

参考文献

亀井孝・河野六郎・千野栄一編著（1996）『言語学大辞典第 6 巻　術語篇』三省堂

神田靖子・山根智恵・高木佐知子（2011）『オリンピックの言語学』大学教育出版

チョ・ヒチョル（2006）『食わず嫌いの韓国』グラフ社

永吉希久子（2006）「オリンピック関連記事にみられる国家意識の変容」『年報人間科学』27　pp. 87-105

野田尚史・高山善行・小林隆（2014）『日本語の配慮表現の多様性－歴史的変化と地理的・社会的変異－』くろしお出版

ポン・フェイ（2004）『日本語の「配慮表現」に関する研究－中国語との比較研究における諸問題－』和泉書院

宮崎和人（2002）「終助詞「ネ」と「ナ」」『阪大日本語研究』14　pp. 1-19

メイナード・K・泉子（1993）『会話分析』くろしお出版

メイナード・K・泉子（1997）『談話分析の可能性－理論・方法・日本語の表現性－』くろしお出版

森山卓郎（1992）「文末思考動詞「思う」をめぐって－文の意味としての主観性・客観性－」『日本語学』11－9　pp. 105-116

山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現－日本語語用論入門－』明治書院

山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

山根智恵（2008）「フィラー」林宅男編著『談話分析のアプローチ』研究社 pp. 131-134

山根智恵（2011）「オリンピック選手のインタビュー談話分析－国技に出場したオーストラリア・中国・韓国・日本選手の比較をもとに－」『オリンピックの言語学』大学教育出版　pp. 90-116

山根智恵・朴点淑（2011）「オリンピック記事における日韓比較」『オリンピックの言語学』大学教育出版 pp. 1-35

山根（吉長）智恵・朴珍希（2015）「ロンドンオリンピックの日韓新聞記事における一考察（原文は「런던 올림픽의 한일 신문 기사를 통한 고찰」『올림픽의 언어를 읽다（オリンピックの言語を読む）』所収）」『山陽論叢』21　pp. 173-195

Chie Yamane-Yoshinaga, Jinny Park-Craig, Yasue Kimura. 2015. Interview Discourse of Sochi Olympics-Comparing Japanese, Korean and Chinese TV and Newspaper Discourses-.Poster session, 14th International Pragmatics Conference. Antwerp. Belgium.